

令和元年度採択 **琉大まんぐろう部ハーブチーム**

PROJECT TITLE

地域生産者に学ぶハーブ生産とハーブ関連商品開発



PROJECT MEMBER

齋藤 明莉 (右) 農学研究科修士 1 年
棚原 佳祐 (左) 農学研究科修士 1 年

※所属と学年は全て採択当時

具志堅 優也 農学研究科修士 2 年
呑田 佐知 農学部 3 年
森川 夏美 農学部 2 年
三浦 彩未 農学部 2 年
新垣 結衣 農学部 1 年

プロジェクト内容

BEFORE

- 農作業体験イベント開催
農業の魅力を広く伝えることを経験
- ハーブを使った商品開発



AFTER

- ハーブを使った商品開発
(ハーブソルト・ボタニカルキャンドル)
- 学生向けの無料ワークショップ開催

STORY

沖縄県の農業を 若い世代にもっと知ってもらいたい

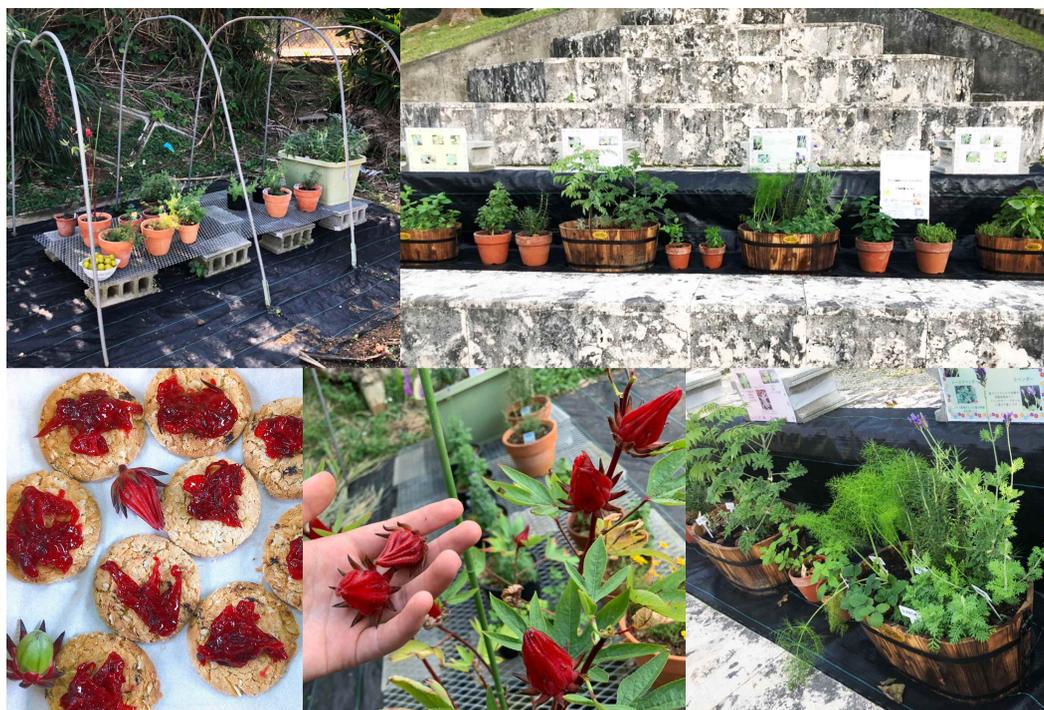
琉大まんぐろう部は、農業生産に興味のある学生が教育的課外活動を行う非公式サークル。目的に応じてチームが編成され、農業と生産活動に関する勉強会やマンゴーの栽培など、様々な活動をおこなっている。

ハーブチームのプロジェクトがちゅらプロで採択されたのは 2019 年。当初はハーブと島やさいの栽培を通して沖縄の農業振興に関わる活動をしている岸本ファーム（糸満市）の協力を得て、ハーブの高付加価値化を目指した商品開発や、農業体験などのイベントを通

して農業の魅力を広く伝えることを計画してきたが、時間的な制約など様々な問題が発生し農業体験イベントは断念。「沖縄の農業を若い世代にもっと知ってもらおう」という一番の目標をキープしたまま商品開発に一本化し、開発した商品をワークショップで参加者によって貰うイベントを開催することになった。

可愛いもの、おしゃれなものなら 興味を持ってくれるのでは

ハーブをクローズアップしたのは、若い世代の興味をひくため。「農業」というと敬遠しがちだが、ハーブやドライフラワーならインテリア雑貨やアロマなどにも使われていて、若い世代にも馴染みがある。メンバーは岸本ファームにてハーブティーやハーブソルト、ローゼルのジャムなど色味の華やかなものを中心に数多く試作し、最終的にドライハーブを使った「ポタニカルキャンドル」と「ハーブソルト」を作ることが決定した。ローズマリー、バジル、ローゼルなどの苗を準備し、12月のワークショップ開催までに収穫・加工できるよう計画を立てて栽培をスタート。ワークショップの告知も兼ねて、ハーブの効能も一緒に紹介する展示栽培も行った。



収穫したハーブは、元々まんぐろう部で栽培していたシークワサーなどとともに凍結乾燥機を用いて色や香りを残したまま乾燥させ、ポタニカルキャンドル用、ハーブソルト用でそれぞれ準備。ハーブソルト用にすりこ木で粉末状にするなど加工を施し、ワークショップ当日は来場者に好みにブレンドしてもらった。ポタニカルキャンドルは、ドライハーブだけでは香りが弱いので、アロマオイルも使用するなど、視覚的な可愛さだけでなく、火をつけた時に立ちあがる香りにもこだわり試行錯誤を繰り返し、メンバー全員が満足行く商品を開発することが出来た。



ワークショップは琉大中央生協 2 階のスペースにて参加費無料で開催。参加者にはバタフライピーのハーブティーを琉大で採れたシークワサーの果汁と共に振る舞われた。シークワサージュースなど酸性のものを入れることで鮮やかなブルーからパープルへと変わる色の変化が楽しめるバタフライピーのハーブティーは、カフェのメニューでよく見られるようになった他、最近沖縄県内で「バタフライピー産業推進団体」が設立されるなど注目を集めている。

プロジェクトを通じて見えたもの



齋藤「私は代表者としてチームを引っ張る責任を強く感じていて、最初の頃は一人で気負い過ぎていました。その頃メンバーは皆、就活やテストなどで忙しくて思うように物事が進まず、一度喧嘩のようになってしまっ。その後ちゃんと話し合っでそれからうまく行ったのですが、最初からもっと周りに仕事を振っていたらと反省しています。でもこの経験を通して、アルバイト先での人間関係にも良い変化がありました。そういった面でもこのプロジェクトは勉強になりました」



棚原「僕はワークショップを開催するにあたり、準備の大変さと計画の必要性を痛感しました。開催場所の確保や申請書類の準備、宣伝などやらなければいけないことがたくさんあり、テストの時期なども重なってしまったので両立が大変でした。このプロジェクトの活動期間は約半年と短く、葉物しか育てられなかったのですが、これがもし1年だったら花が咲く種類のものとかもっと色々な種類のハーブを育てられたし、開発した商品をマルシェに卸したりも出来たのにと心残りもあります」

ワークショップ参加者へのアンケートの結果、78%が「ハーブについて参加前よりも興味が湧いた」と回答した。ハーブというアイテムを前面に押し出したので、ワークショップの来場者は女性が中心になるかと思われたが、実際は約半数が男性。彼らはもともとハーブに興味があった訳ではないが、人から誘われてワークショップに参加してみたことで初めてハーブという存在に興味を持ったという。これは正にプロジェクトの狙い通り。イベントを成功させるためには、ワークショップの参加者に楽しんでもらうことはもちろん、自分たちがワクワクすることが一番だと語る齋藤さん。トラブルが起きても頑張ってきたのは、メンバー全員がこのプロジェクトにワクワクしていたからなのだ。

当初の計画どおりに行かないことがあっても、そこから学び取り最終的に意味のあるカタチに出来ればいい。学生から飛び出してくる新しいアイデア、ユニークなアイデアを応援してくれる。それが「ちゅらプロ」だ。

成 果

- 自ら育てたハーブを使った商品開発（ボタニカルキャンドル・ハーブソルト）
- ワークショップ開催
- 学生の農業に対する関心の向上